



日本学士院ニュースレター

明六社だより

琴棋書画を楽しむ昌平坂学問所『昌平黌』の教官たち(谷文晁)



左下：甲子七月十八日對岳樓宴集當日真景如此 文晁

トピックス：

- 平成20年度日本学士院賞受賞者が決定しました。
- 第4回日本学士院学術奨励賞受賞者が決定しました。
- 新会員9名を選定しました。
- 春の公開講演会を北海道大学で開催します。

目次：

ニュースレター創刊によせて	2	国際学士院連合関係活動	15
平成20年度日本学士院賞	3	日韓学術フォーラム	16
第4回日本学士院学術奨励賞	6	本院所蔵資料紹介	17
新会員選定	8	会館施設の利用案内	18
第48回公開講演会の開催	10	寄附のご案内	18
総会での論文報告・談話	12	(会員寄稿)上野の山にも、時は早く流れる(私記)	19
論文を募集しています	14	会員の逝去	20
外国アカデミーとの交流	15	編集後記	20

誌名の「明六社」とは：

明六社(めいろくしゃ)は、明治6年7月にアメリカから帰国した森有禮(もりありのり)が、後の東京学士会院会員となる福沢諭吉・加藤弘之・中村正直・西周(にしあまね)・津田真道・箕作秋坪・杉亨二らとともに啓蒙活動を目的として結成した、日本で最初の近代的啓蒙学術団体です。

名称の由来は明治6年結成からきており、毎月2回(1日と16日)に会合を開くほか、『明六雑誌』を発刊しました。また、我が国の公開講演会は明六社をもって嚆矢とされています。

その後、明六社は明六会となり、東京学士会院、帝国学士院を経て、日本学士院へと至る流れの先駆となっています。

ニュースレター創刊によせて

日本学士院の沿革を遡れば、それは西暦1797(寛政9)年に徳川幕府によって創設された昌平坂学問所、『昌平覺』に端を発するものとされている。たまたま手元に草創期当時の学問所の教官たちが琴棋書画を楽しむ姿を活写した、谷文晁の画幅がある。日本学士院『ニュースレター』の創刊に寄せて披露させていただきたい(表紙)。

この絵が描かれた甲子という年は西暦に換算すれば1804年、将軍家斉の時代に当たる。画中の人物にはそれぞれの名前が付記されている。

先ず学問所の学頭、柴野栗山は当時の三名筆とされた人、画面中央に堂々と座して墨筆を振るっている。復古学で知られる尾藤二洲は侍童に導かれて学者たちの集いに加わろうと奥手から近づいている。彼と互いに切磋琢磨したといわれている頼春水(山陽の父)も、画面手前でなにかの準備に余念のない様子。同じく学問所の教官であった岡田寒泉も、机を前にして元気な姿を画中に見せている。

当時まだ30歳ばかりの若さゆえの遊び心であろうか、この絵の作者、文晁自身も画中の人となり、大きい紙をひろげて遠くの山影を写している。対岳楼で催された

優雅な集いをそのままに写したと付記されており、遠景には富士も浮かんでいる。どこか昌平坂の高みにある美しい庭園で開かれたのであろう、大学者たちの夢のように楽しい集いを彷彿する。

しかし、この画中の人々に迫る当時の内外の情勢は、寸時の油断も許さない程に緊迫したものであった。国の内からは放漫財政の後始末が踵を接するように迫ってくる。また、外からは幕府に対してロシアの船、イギリスの船が新しい対外関係を迫っている。

その内憂外患に処する政策立案の責にあったのが柴野栗山その人である。彼は自作の漢詩の冒頭に『借問す、夢は真か、覚めて後真か』という一句を遺しているが、これは文晁画中の己の姿をみて抱いた感懐であったのではないかとさえ思われる。彼が直面していた領土や公益の諸問題の中には幾つか200年後の今日に至るまで長い尾をひいて、私たちに解決を迫っているものがある。

このたび、『ニュースレター』の創刊に際して、日本学士院に付託されている思いの深さを草創期の先哲たちの姿から、あらためて感じ取る次第である。

院長 久保正彰



久保正彰



授賞式、公開講演会及び毎月の総会が行われる議場

日本学士院は、学術上功績顕著な科学者を優遇するための機関として文部科学省に設置されており、学術の発展に寄与するため必要な事業を行うことを目的としています。

本院は、明治12年に福沢諭吉を初代会長として創設された「東京学士会院」を前身とする120年余の歴史を持ち、学術的な業績をもとに選定された定員150名の会員により組織されています。

平成20年度日本学士院賞

平成20年3月12日開催の第1017回総会において、平成20年度日本学士院賞の受賞者が決定しました。

本院における授賞制度は、明治43年に創設され、学術上特にすぐれた論文、著書その他の研究業績に対して授賞を行っています。授賞式は明治44年より毎年挙行され、平成20年度で第98回を迎えます。昭和24年以降の授賞式には天皇陛下の行幸を、平成2年からは天皇皇后両陛下の行幸啓を仰いで挙行されています。過去の受賞者には、木村栄、高峰譲吉、野口英世をはじめ、後にノーベル賞を受賞した湯川秀樹、朝永振一郎、福井謙一、江崎玲於奈、小柴昌俊、野依良治がいます。

また、昭和62年には、本院名誉会員エジンバラ公フィリップ殿下からの申し出により、「日本学士院エジンバラ公賞」が創設され、広く自然保護及び種の保全の基礎となるすぐれた学術的成果を挙げた者に対して、隔年にこの賞を授与することとしています。



恩賜賞・日本学士院賞

「分子の構造・機能・反応設計に関する理論的研究」

工学博士 諸 熊 奎 治 73歳

京都大学福井謙一記念研究センターリサーチリーダー、米国エモリー大学名誉教授、分子科学研究所名誉教授、総合研究大学院大学名誉教授

フラーレンなど炭素系分子材料の生成過程や、遷移金属錯体による均一系触媒反応の反応機構を解明するとともに、巨大分子系を効率的に研究するためのオニウム法を開発、巨大分子系の量子理論の研究に新しい道を開いた。

日本学士院賞

『ローマ帝政初期のユダヤ・キリスト教迫害』

保 坂 高 殿 52歳

千葉大学文学部准教授

従来のキリスト教迫害史の研究上の前提を覆し、ローマ帝国側史料の分析により、教会側史料の証言を偏重しがちであった研究に批判的一石を投じ、その根本的再検討を迫った。

日本学士院賞

『日本の不平等』

博士(経済学) 大 竹 文 雄 47歳

大阪大学社会経済研究所長・教授

政府統計やアンケート調査結果を分析し、日本における所得・賃金の格差問題の実態と原因を、米国・英国等とは異なり、人口の高齢化と世帯構成の変化(二人世帯、単身世帯の増加等)にあることを実証的に明らかにした。



第39回授賞式(昭和24年)

※ 年齢・肩書きは授賞決定時(平成20年3月12日現在)

※ 授賞理由等の詳細は日本学士院ホームページに掲載されています。 (<http://www.japan-acad.go.jp/>)

平成20年度日本学士院賞

日本学士院賞

「極低温電子顕微鏡の開発による膜タンパク質の構造決定」

理学博士 藤 吉 好 則 59歳

京都大学大学院理学研究科教授

極低温電子顕微鏡の開発を通じて、これまで解析が困難であった膜タンパク質の構造解析を行い、生体内で重要な生理機能を担う種々の膜タンパク質の構造を明らかにした。構造生理学という新しい分野の創設に貢献した。



恩賜賞
(御紋付銀花瓶)

日本学士院賞

「水メーザー源のVLBI観測による活動銀河中心核と巨大質量ブラックホールの研究」

理学博士 中 井 直 正 53歳

筑波大学大学院数理物質科学研究科教授

銀河の中心に巨大質量ブラックホールがあることを、確固たる証拠を下に世界で初めて証明した。多くの銀河の中心にこのようなブラックホールがあると考えられているが、その先駆をなすものである。



日本学士院賞

「ファイバー中の光ソリトンの発見とプラズマ乱流の自己組織化に関する研究」

Ph.D., 理学博士 長谷川 晃 73歳

ソリトン通信代表、中国天津大学客座教授、中国浙江大学客座教授

ファイバー中の光情報伝送を記述する基本方程式の導出と光ソリトンの発見、及び、プラズマ中の乱流を記述する基本方程式を導出し、光通信、核融合プラズマの閉じ込めに関する研究開発に貢献した。



日本学士院賞賞牌

日本学士院賞

「植物核外ゲノム及び性染色体の遺伝子構成と分子進化に関する研究－ゼニゴケゲノムを中心として－」

農学博士 大 山 莞 爾 68歳

石川県立大学生物資源工学研究所教授、京都大学名誉教授

ゼニゴケ葉緑体ゲノム及びミトコンドリアゲノムの遺伝情報解析並びに性染色体の遺伝子構成と分子進化に関する一連の研究により、国内外の植物分子生物学研究、ゲノム研究の発展に大きく貢献した。



日本学士院エジンバラ公賞賞牌

日本学士院賞

「新しい生理活性ペプチドの発見とその基盤的研究ーグレリンを中心としてー」

理学博士 寒 川 賢 治 59歳

国立循環器病センター 研究所長

独自の手法を開発し、脳に作用して食欲を刺激するグレリンの発見をはじめ、生体の細胞間情報伝達物質として重要な役割を果たしている新しい生理活性ペプチドを多数発見。基礎医学だけでなく臨床医学の発展に大きく貢献した。



両陛下に研究内容を説明する受賞者(第97回)

日本学士院賞

「パラミクソウイルス病原性の分子基盤の解明と新規発現ベクターの創出」

医学博士 永 井 美 之 68歳

独立行政法人理化学研究所感染症研究ネットワーク支援センター長、名古屋大学名誉教授

ウイルス病原性の分子基盤を世界に先駆けて明らかにするとともに、基礎研究のために確立した遺伝子操作技術を遺伝毒性のない高発現RNAウイルスベクターの創出に発展させ、世界で最も有望視されるエイズワクチンの開発をはじめ先端医療への幅広い応用を示唆した。



受賞者記念写真(第97回)

日本学士院エジンバラ公賞

「流域単位の生態系の多様な構造の解明と環境変動への応答に関する研究ーとくに安定同位体フィンガープリント法を駆使したその総合ー」

理学博士 和 田 英太郎 68歳

独立行政法人海洋研究開発機構フロンティア地球環境センター生態系変動予測プログラムディレクター、京都大学名誉教授、総合地球環境学研究所名誉教授

これまで困難とされていた生物界の窒素同位体比の測定を世界で初めて本格的に行い、その自然存在比の分布則を提示。地球環境変動下における生態系や人間活動による生態系の歪みの解析に新たな道を開いた。



第98回日本学士院賞授賞式は、本年6月上旬に举行される予定です。

第4回日本学士院学術奨励賞

平成20年2月12日開催の第1016回総会において、第4回日本学士院学術奨励賞の受賞者が決定され、3月3日に授賞式が挙行されました。

「古典期マヤ人の日常生活と政治経済組織の研究」

博士(人類学) 青山 和 夫 45歳

茨城大学人文学部教授

ホンジュラスのコパン遺跡等の国際共同調査団の一員として調査に従事し、各種石器の定量・定性の分析結果をデータ化。これにより古典期マヤ国家における交換の役割と性格、政治経済組織、都市および戦争の内実等について実証的に解明した。

「磁気化学を基盤とした新規磁気物性の創出に関する研究」

博士(理学) 大越 慎一 42歳

東京大学大学院理学系研究科教授

物理化学をベースに斬新な設計概念を駆使して、分子と金属イオンが結合した金属錯体により、従来に無い磁気物性を示す物質を数多く創出した。

「地球規模の水循環変動と世界の水資源需給の予測」

博士(工学) 沖 大 幹 43歳

東京大学生産技術研究所教授

全地球の水循環と水収支を種々の観測および世界の水利用に関する膨大なデータに基づき定量的に推定し、大気と陸面の相互作用および人間活動の影響も考慮して、将来の水資源需給を予測可能なモデルを構築した。



受賞者に贈られる日本学士院学術奨励賞賞状及び賞牌



日本学士院学術奨励賞は、若手研究者を顕彰してその研究意欲を高め、今後の一層の研究を奨励することを目的として実施しています。

本賞の選考は、独立行政法人日本学術振興会の日本学術振興会賞受賞者を対象として行っています。

平成20年3月3日(月)に挙行された授賞式の様子



院長から賞状及び賞牌を授与



お言葉を述べる秋篠宮殿下



秋篠宮同妃両殿下と記念写真

※ 年齢・肩書きは授賞決定時(平成20年2月12日現在)

※ 授賞理由等の詳細は日本学士院ホームページに掲載されています。 (<http://www.japan-acad.go.jp/>)

第1巻 第1号



記念パーティーで両殿下と懇談
する受賞者



「海馬シナプス可塑性の分子機構」

博士(医学) 林 康 紀 42歳

理化学研究所脳科学総合研究センター ユニットリーダー

マサチューセッツ工科大学脳認知学部 ピカワー学習記憶研究所
理研-MIT脳科学研究センターアシスタント・プロフェッサー

脳の高次機能、記憶のメカニズムの素過程である海馬長期増強現象(LTP)について分子生物学、薬理学、電気生理学とイメージングを統合して優れた先見性と独創性のある研究成果をあげた。



「植物におけるホウ素輸送体の発見」

博士(農学) 藤 原 徹 43歳

東京大学生物生産工学研究センター准教授

植物における必須元素の一つとして知られるホウ素の輸送に関わる遺伝子の初めての発見を起点に、植物栄養学の領域で世界をリードする先進的研究を展開し、基礎、応用の両面で今後のさらなる発展が期待される。

「真の世界史」を学ぶ: マヤ文明は洗練された「究極の石器の都市文明」

第4回日本学士院学術奨励賞受賞者 青山和夫(マヤ文明学、マヤ考古学、文化人類学)

私は1986年以来、中米ホンジュラスとグアテマラでマヤ文明の国際共同調査に従事しています。世界史の教科書における西洋侵略前のアメリカ大陸の記述は、質量ともに極めて貧弱です。アメリカ大陸と旧大陸の古代文明を対等に位置付け、バランスの取れた「真の世界史」を学ぶ上で、マヤ文明は重要です。マヤ文明(前600年頃～16世紀)とは、旧大陸世界と交流することなく、中米で独自に発展したモンゴロイド先住民の石器の都市文明です。石器が主要利器であったことは、マヤ文明が、旧大陸の「四大文明」よりも「遅れていた」ことを必ずしも意味しません。古代マヤ人は、結果的に、金属利器、荷車、大型の家畜を必要とせずに都市を築き上げ、古代アメリカ大陸で文字(マヤ文字は4～5万)、ゼロの概念を含む算術、暦、天文学を最も発達させました。私はその意味で、マヤ文明を人類史上で最も洗練された「究極の石器の都市文明」と位置付けています。

ご案内

(株)ベネッセ・コーポレーション発行の『VIEW21』に、本院有志会員が経験を踏まえた「学問の面白さ」を伝える「10代のための「学び」考」というコーナーがあり、学生時代(中学校、高校時代)の思い出、研究者を志したきっかけ、研究の面白さ、中学生・高校生へのメッセージなどが掲載されています。ぜひご覧ください。

http://benesse.jp/berd/center/open/kou/view21/2007/04/o6chu_manabi_o1.html

新会員選定

平成19年12月12日開催の第1014回総会において、日本学士院法第3条に基づき、次の9名を新たに日本学士院会員として選定しました。

第1部第1分科

難波 精一郎 75歳

大阪大学名誉教授

専門分野: 心理学

音響心理学の第一人者で、時々刻々の音の印象を捉える手法を開発、騒音制御や機械音の改善、各種の音源に関する言語的記述の国際比較を実施。平成10年「騒音に係る環境基準」の改訂に貢献した。



第1部第2分科

西尾 勝 69歳

財団法人東京市政調査会理事長、東京大学名誉教授

専門分野: 行政学

日本の行政を分析するための基礎概念と学問体系の構築に大きく貢献した。また、行政学を学問的背景とした、行政・地方自治改革への実践的関わりは、西尾氏の研究の大きな特徴となっている。



第1部第1分科

玉泉 八州男 71歳

東京工業大学名誉教授

専門分野: 英文学

シェイクスピア時代の演劇資料をはじめ、当時の膨大な資料に基づく緻密な研究によって、イギリス文学史でもっとも活気にあふれていたこの時代の全体像を明らかにした。



第2部第4分科

外村 彰 65歳

株式会社日立製作所フェロー

専門分野: 物理学

高輝度高干渉性の電子線を世界に先駆けて実現し、電子線ホログラフィーの実用化に成功した。また、電子の「粒子性と波動性の二重性」を示す“二重スリットの実験”や、長年論争になっていた“アハラノフ・ボーム効果の実験”を疑義のない形で行い、量子力学の基礎に多大な寄与を果たした。



第1部第1分科

青柳 正規 63歳

独立行政法人国立美術館国立西洋美術館長、東京大学名誉教授

専門分野: 美術史学・古典考古学

古代ローマ遺跡ポンペイの研究者で、遺跡に現存する500点余の壁画図版に学術的解説を施した美術書を完成し、高い評価を得た。考古学・美術史の域を超え、政治と社会をも視野に入れ古代ローマの全体像に迫っている。



第2部第4分科

柏原 正樹 60歳

京都大学数理解析研究所長・教授

専門分野: 数学

1970年代から現在まで代数解析学の革新と発展、その応用を主導してきた。代数解析学とD加群の理論は、現代数学の基本的手段として位置付けられ、現代数学の中に大きな流れを作り出している。



※ 年齢・肩書きは選定時(平成19年12月12日現在)

※ 新会員の選定理由・研究概要の詳細は日本学士院ホームページに掲載されています。(http://www.japan-acad.go.jp/)

第2部第5分科

堀川 清 司 80歳

東京大学名誉教授、埼玉大学名誉教授、
武蔵工業大学名誉教授

専門分野： 土木工学(海岸工学)

海岸工学を学問の一分野として確立した。堀川氏の漂砂現象の解明と海浜変形予測手法の開発は、その後集積された現地データを用いて改良され、現在多くの海岸に適用されている。

第2部第6分科

喜 田 宏 64歳

北海道大学大学院獣医学研究科教授、
北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター長

専門分野： 獣医微生物学

インフルエンザの疫学研究を地球規模で行い、ウイルスの伝播経路を明らかにするとともに、新型ウイルスが出現する機構を実証するなど高病原性鳥インフルエンザ対策ならびに人獣共通感染症克服のため、広範な研究を展開している。

第2部第7分科

須 田 立 雄 72歳

埼玉医科大学ゲノム医学研究センター
客員教授、神奈川歯科大学客員教授、
昭和大学名誉教授

専門分野： 歯学(歯科基礎医学)

生体のカルシウム代謝を調節する最も基本的な因子であるビタミンDの臨床応用のための基礎研究に取り組み、骨粗鬆症患者の基本的な治療薬である活性型ビタミンDの合成誘導体(1 α -ヒドロキシビタミンD₃)を考案した。

会員はこうして選ばれます

- 1月 官報公示
- 2月 学術機関、学会からの推薦
- 3月 会員選考開始



約8ヶ月にわたり綿密な審査が行われます

- 12月 部会投票、総会承認を経て
新会員決定

会員選定状授与式

(平成19年12月19日(水))



院長から選定状を
授与される新会員



役員との懇談

第48回公開講演会の開催

広く一般の方々を対象に、多様化している学習ニーズに応えるとともに、本院の活動を理解してもらうことを目的として、会員を講師に毎年春・秋2回実施しています。

春の講演会を開催します。多くの方々のご参加をお待ちしております。

日 時： 平成20年5月31日(土) 午後1時～4時10分

場 所： 北海道大学学術交流会館小講堂

テーマ： 地震を考える

共 催： 北海道大学

後 援： 北海道

<日 程>

12:30 開場

13:00 開会

13:20 『地震予知の現状について』

上田 誠也 (地球物理学) 日本学士院会員、東京大学名誉教授



上田誠也会員

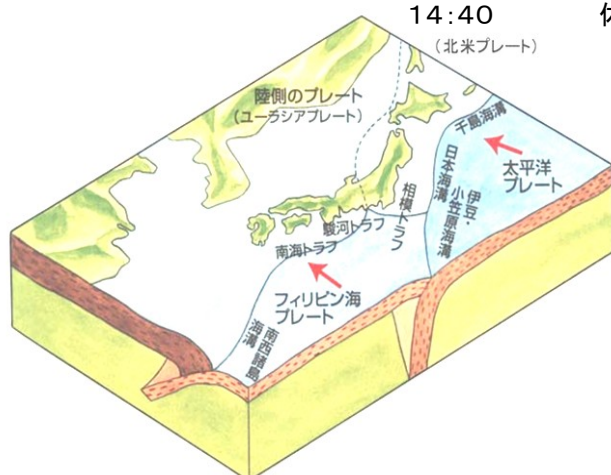
多岐にわたる大地震の災害の中でも、各市民にとってもっとも切実なのは自分や親しい人びとの死であろう。地震による死はその大部分は建造物の倒壊によるもので、それは地震発生の数分以内、すなわちいかなる救援活動も始まる前におこる。

これから身を守る決め手は、建造物の耐震強化と“短期”地震予知以外にはあるまい。本講演では後者について考察する。

“短期”地震予知を行なうには、何らかの信頼できる前兆現象をとらえなければならないが、それらの存否や観測可能性などの基本的問題については研究者の間で見解が分かれている。地震学を専門とはしないが、短期予知に関わる地球化学・水文学・地球電磁気学・固体物理学・電波科学などの研究者には肯定論が多いが、予知計画に中心的役割を担う地震学者は否定的である。この意見の不一致にはいくつかの原因が考えられるが、地震予知研究進展の大きな妨げになっている。かかる事態を招来した背景事情と今後のありかたなどについて私見をのべる。

14:40
(北米プレート)

休憩



入場は無料です。

下記まで事前にお申込みください。

お申し込みは、日本学士院ホームページから、または、FAX、往復ハガキ、E-mailでお願いします。

(申込時の記入事項：氏名、住所、電話番号等連絡先)

日本学士院 公開講演会係

〒110-0007 東京都台東区上野公園7-32

TEL 03-3822-2101 FAX 03-3822-2105

電子メール kouenkai@japan-acad.go.jp

ホームページ <http://www.japan-acad.go.jp/>

第1巻 第1号

.....



過去の講演会の様子

14:50

『災害の経済的損失』

貝塚啓明(財政学・金融論)日本学士院会員、京都産業大学客員教授、
東京大学名誉教授



貝塚啓明会員

自然災害(地震、火山噴火、津波など)は、大きな社会的影響をもたらす。例えば、関東大震災(大正12年)は大きな人的被害にとどまらない衝撃を日本社会に与えた。日本社会は首都東京を中心に麻痺した状況に落ち込んだ。その後、第二次大戦による経済的被害は大きなものがあったが、自然災害とはいえない。ここでは最近の災害(阪神・淡路大震災や中越地震など)を中心に、経済的被害(建築物、インフラ関係、ライフライン施設への被害)の大きさを説明する。また、歴史的に有名なリスボン大地震や諸外国の最近の自然災害の被害をできる限り言及する。人命損失は単なる経済的損失ではないので、その評価は簡単ではないことも議論したい。

16:10

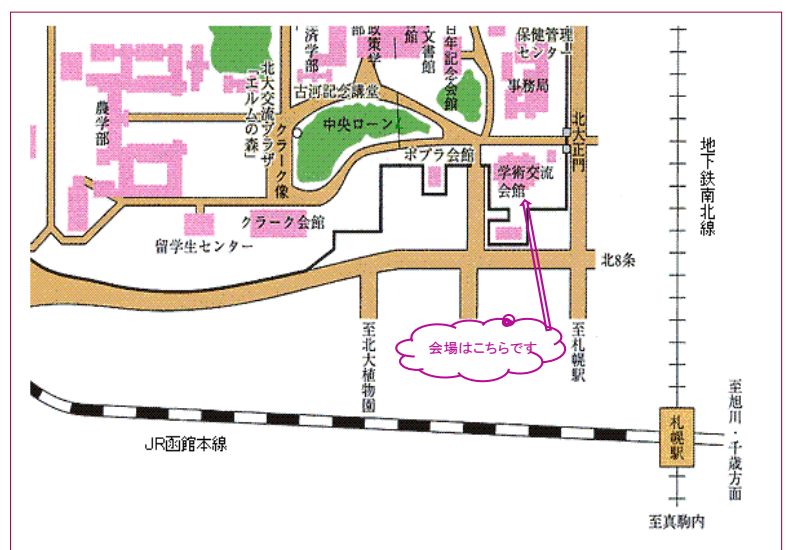
閉 会



昔、大地震の原因は、鯀(なまず)の仕業と考えられていました。

この絵は、地震を起こした大鯀を懲らしめている人々と、それを止めに入る職人達(左上)の様子を描いています。

(東京大学地震研究所所蔵)



会場(学術交流会館)は、北海道大学正門を入ってすぐの左側です。会場までのアクセスは

<http://www.hokudai.ac.jp/bureau/map/sapporo.html>

総会での論文報告・談話

毎月開催される日本学士院総会では、第1部(人文学部門)は会員が論文を提出、第2部(自然科学部門)では会員の談話とともに学術上優れた外部研究者の論文を中心に紹介が行われています。

以下は、最近提出された会員の論文・談話です。

総会	部	題 目	提出(担当)者
1013回	第1部	屏風絵と金	武 田 恒 夫
		法科大学院制度の現在と将来	奥 田 昌 道
	第2部	コムギにおけるプラズモン分析(談話)	常脇恒一郎
1014回	第1部	『源氏物語』縮訳の一樣態－水田恭太郎「源氏物語葉ぐさ」について－	秋 山 虔
		小泉効果	三 宅 一 郎
	第2部	ガングリオシド研究の始まり(談話)	山 川 民 夫
1015回	第1部	最近のインサイダー取引規制違反 日本の社会保障	河 本 一 郎 貝 塚 啓 明
	第2部	宇宙環境利用の科学(談話)	井 口 洋 夫
1016回	第1部	中国農村演劇の指向するもの－「孝」と「節」の畸形化－	田 仲 一 成
		Polycontextuality とはなにか？	村 上 淳 一
1017回	第1部	「どうせ死ぬなら」と wenn schon sterben －「どうせ」と schon について－	岩崎英二郎
		競争政策の方向と新独占禁止法	宮 澤 健 一
	第2部	降雨中の電波伝搬と散乱現象(談話)	岡 村 總 吾

第1部の発表論文の一部は、『日本学士院紀要』に掲載されます。

<http://www.japan-acad.go.jp/japanese/houbun.htm> をご覧ください。



部会での報告風景



合同談話会

第1部 武田恒夫会員論文報告「屏風絵と金」より抜粋

金は、その独特の表現効果を発揮することにより、古来、日本絵画の様々な画面に生かされてきた。本日のテーマを屏風絵に限定したのは、中世史料に散見される「金磨付屏風」について、通例の所謂金屏風と区別する必要があるのではないか、という発想によるものである。ただし、東京国立博物館における「室町時代の屏風絵」展(平成元年)図録に掲載された山根有三氏の「室町時代の屏風絵概観」は金磨付屏風に注目を示した最初の論考であるが、その後も実態についてはテーマとならないで今日に至っている。

さて、絵画表現の素材として、金は次のように大別し得る。

- i 筆描する。(金泥)
- ii 塗る。引く。(金泥)
- iii 蒔く。振る。(金砂子、切箔、野毛等)
- iv 貼る。押す。(金箔)

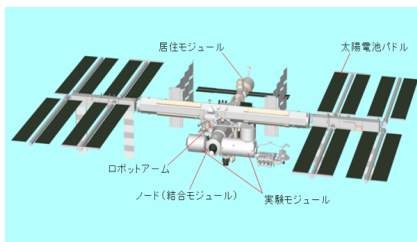
金磨付とはどのような手法を指すのか、これを間接的に示唆する資料から、その特色をさぐってみることにしたい。

興福寺に伝わる多聞院日記のうち『英俊日記』天正9(1581)年11月25日の条によると、かねてより筒井順慶に懇請していた「磨付ノ屏風」ではなく、「惣金の新調屏風」が到来したという記事が見出される。

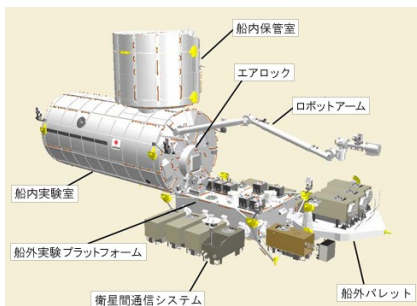
第2部 井口洋夫会員談話「宇宙環境利用の科学」抄録

16ヶ国が協力して巨大な国際共同研究事業「国際宇宙ステーション(ISS)」の構築が平成10年に開始され、来年より日本の宇宙実験施設JEM(愛称「きぼう」)をISSに合体し、本格的な宇宙環境利用の科学(自然科学並びに人文科学)研究が開始される。宇宙環境とは、地球上空から数百キロの宇宙空間の環境をいい、次の7つの特徴に要約される。①微小重力： $10^{-6}g \sim 10^{-4}g$ 、②高真空： $10^{-5}Pa$ の空間、③特徴的な大気組成：85%が原子状酸素、④宇宙放射線：さまざまな宇宙放射線の複合環境、⑤広大な視野：全天視野の確保、⑥豊富な太陽エネルギー： $1.4kW/m^2$ 、⑦過酷な軌道上熱環境：真空・微小重力環境での熱管理

宇宙環境利用の科学研究の嚆矢は東京大学教授熊谷清一郎先生で50年前の昭和31年。対流を無くして火焰が丸くなるという実験で国際燃焼学会の第一回学会賞を得られた。課題は「落下塔内の液滴の燃焼」であった。爾来50年、多くの宇宙環境利用実験が行われ、日本でも200件余りが行われた。微小重力下での実験がその代表である。それらの概要を述べ、興味ある宇宙実験の事例として水の挙動について数分間の録画を示し、この分野の現況を報告する。



国際宇宙ステーション (ISS) 完成イメージ
(提供: JAXA)



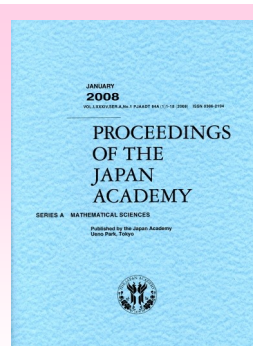
きぼう・日本実験棟 (提供: JAXA)

論文を募集しています

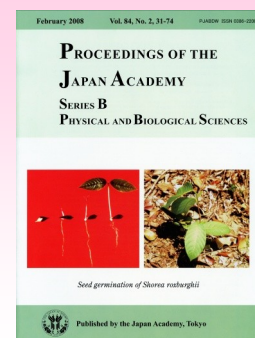
本院発行の欧文紀要“Proceedings of the Japan Academy”は、明治45年の発行から90年以上の歴史を有し、自然科学の全分野をカバーした欧文誌です。

投稿論文は、学士院会員が中心となり外部研究者を含めた日本を代表する研究者による速やかな審査を経て掲載が決定され、約1ヶ月で発行されると同時にオンライン公開され、世界中からアクセスされています。ノーベル賞やフィールズ賞を受賞した方々をはじめ、若手研究者の方々も投稿され掲載されています。

一般科学者からの論文投稿を広く募集しています。



PJA-Ser.A



PJA-Ser.B

Proceedings of the Japan Academy の特徴

Series A (数学分野)

- Original Paper (Rapid Communication を含む。)を掲載します。
- 年間10号出版されます。
- 論文は、Project Euclid (<http://projecteuclid.org/pja>)において無償でオンライン公開します。

Series B (数学以外の自然科学分野)

- 日本学士院賞受賞者を始めとする、わが国の優れた研究者の業績をまとめた総説論文を掲載します。
- 将来発展が期待される萌芽的研究の原著論文を掲載します。
- 年間10号出版されます。
- J-STAGE (77巻～最新号、<http://www.jstage.jst.go.jp/browse/pjab>)、Journal@rchive (創刊～76巻、http://www.journalarchive.jst.go.jp/english/top_en.php)において無償でオンライン公開します。

Series A, Series B ともに投稿料・掲載料は無料です。

掲載論文の別刷50部を進呈しています。(別冊超過分は有料です。)

投稿方法等は、本院ホームページをご覧ください。

Series A: <http://www.japan-acad.go.jp/english/PJAA/pjasera.htm>

Series B: <http://www.japan-acad.go.jp/english/PJAB/pjaserb.htm>

編集委員

Series A: 広中平祐 (Ser.A Editor-in-Chief)、森 重文、柏原正樹

Series B: 山川民夫 (Ser.B Editor-in-Chief)、江崎玲於奈、古在由秀、大澤文夫、井口洋夫、樋渡宏一、小柴昌俊、山崎敏光、松野太郎、西澤潤一、本多健一、白川英樹、藤田廣志、野依良治、田中耕一、山田康之、別府輝彦、早石 修、杉村 隆、豊島久真男、井村裕夫、大塚正徳、関谷剛男

Advisory members 黒川 清、鈴木邦彦

現在日本の若い研究者は競って国外の有名雑誌に投稿する風潮があります。これは我が国の科学の伝統が浅くそれに比肩するほどの高水準の学術雑誌が育っていない故かと思われます。今では外国を凌駕する研究が輩出している我が国の業績が、ともすれば、それによって軽く見られていることは否めません。

日本学士院は従来より発行しているPJA-Bの編集方針を改めて、我が国の誇る代表的な業績を英文総説として後世に残すとともに、オリジナルペーパーの早急な発表誌としての歩みを始めています。

奮ってご投稿をお願い致します。

PJA-Ser.B Editor-in-Chief 山川 民夫

外国アカデミーとの交流

ロンドン王立協会を始め、現在までに海外の9カ国10機関との間に交流協定を結び、相手国の相互訪問、学術情報の交換、さらには共同研究を通じて学術の交流を促進しています。

<平成19年度実績>

	相手先	会員氏名	期間
受 入	ロンドン王立協会	Lorna Casselton会員	20. 3.10～ 3.24
	ハンガリー科学アカデミー	Gábor Hamza会員	19.10.16～10.29
	大韓民国学術院	Cha, Ha Soon会員 Chung, Chin Hong会員	19. 7. 2～ 7. 7
	ドイツ自然科学・人文科学アカデミー連合	Gerhard Gottschalk会員	19. 9.18～ 9.24
派遣	英国学士院	水田 洋 会員	20. 3.13～ 3.23
	フランス科学アカデミー	大村 智 会員	19. 9.21～ 9.27



ハンガリー Hamza会員



大韓民国 Cha会員、Chung会員

国際学士院連合関係活動

本院は、国際学士院連合(U.A.I.)に1919(大正8)年に加盟して以来、今日に至るまで中枢機関として共同研究活動に参画するなど積極的な活動を展開しています。

<平成19年度実績>

	氏名	期間	内容
受 入	中国第一歴史檔案館 Feng, Boqun教授 Wang, Daorui教授 Xia, Xiaohua館員	19. 5.28～ 6. 1	「日本関係清代檔案をめぐる国際研究集会」出席及び研究打ち合わせ
派遣	原 實 会員	19. 5. 31～ 6. 9	第81回総会(ノルウェー)
	大分大学 鳥井裕美子 教授	19.12.12～12.20	オランダ日本学協会年次総会、「近世国際関係史の研究動向」国際会議出席
	神戸大学 塚原東吾 教授	20. 1.28～ 2. 5	東アジア科学史図書館・史料に関する(歴史)「テキストの読み方について」国際会議出席
	東京大学 保谷 徹 教授	20. 3.10～ 3.23	オランダ及び英国(ロンドン・ケンブリッジ)における史料調査
	東京大学 藤田 覚 教授 木村直樹 助教	20. 3.10～ 3.19	

国際学士院連合 (UAI)

Union Académique Internationale

1919年10月創設

人文社会科学系の学術分野において諸国アカデミー間の国際協同事業を振興すること、すなわち文献学、考古学、史学及び倫理学、政治学、社会学などが、連合内の学士院その他の機関によって発展するよう国際的協力を図ることを目的とし、約60カ国70のアカデミーが参加しています。

日韓学術フォーラム

大韓民国学術院との間で締結した協定に基づき会員相互の交流を行っていますが、平成18年度より各専門分野における自由討議を主体とする研究会(学術フォーラム)を開催しています。

第1回は平成18年9月20日から22日の間、学士会館(東京神田)において、「法学」及び「化学」について研究報告並びに討議を行い、日韓の学術について

相互理解を深めました。

第2回は平成19年9月27日から29日にソウル大学湖巖教授会館(韓国)において「一般－基礎教育の再考」をテーマに開催しました。

第3回は、本年秋に東京で「比較文化」をテーマに開催が予定されています。

第1回フォーラム



大韓民国学術院会員
との記念撮影

発表の様子(化学セッ
ション)



第2回フォーラム

金 泰吉大韓民国学
術院会長の基調講演
を聴く参加者



ソウル大学湖巖教授
会館

教育における複眼的視点

日本の現在の教育では、客観的知識を授ける面は進んでおりますけれども、自分で考え判断し、その判断に基づいて責任を持って行動する－それを主体的知恵と私は申しておりますが－を養う面が欠けているように思います。そういう客観的知識と主体的知恵の両方を教育の面で、調和を持って進めることが大変重要ではないかなということを、このごろの教育問題と関連して、感じております。学び、考え、判断し、そして実行することの重要性を、現在の情報社会の中で特に強調したいと存じます。「学びて思わざれば即ち罔し、思いて学ばざれば即ち殆し」という論語の言葉は、現在のわが国においてますます重要な意義を持っていると申せましょう。

教育の面と関連してもう一つ申し上げたい複眼的視点は、普遍性と個別性です。均一化と多様化と申してもよいでしょう。一高校長として、また戦後文部大臣として活躍された安部能成は、普遍的な理念のもとに個性や能力に応じた個別的な教育を行うことの必要性を唱えています。戦後のわが国の教育は民主化の名のもとに画一化され、結果の平等が重視されすぎたことは否定できません。徒競争で速いものは待ち、皆で手をつないでゴールするといった例も知られています。こうした教育における結果の平等の重視は、各個人の特質を減退させて平均化する力として働きます。こうした“凡化力”が各個人の能力や性格の特色を伸ばし個性豊かな人格を形成するという教育本来の目的に反することは改めて申し上げるまでもありません。個人の能力と性格を重視した吉田松陰の松下村塾が傑出した人物を輩出したことに改めて思いをいたす必要があると存じます。

さらに広く国際的な視点に立てば、それぞれの民族や国家や地域に固有な文化や伝統を尊重する教育の個別性と広く国際的に適用される教育の普遍性との調和ある発展が重要となりましょう。特に21世紀において存在意義が増大することが期待されるアジア地域において普遍性と個別性の調和を重視した教育が発展し、新しい文化の創造を通じて“アジアの時代”が実現することを期待いたします。

(第2回日韓学術フォーラム 長倉前院長基調講演より抜粋)

本院所蔵資料紹介

このコーナーでは、本院が所蔵する貴重図書・資料についてシリーズで紹介します。

第1回は「和算図書」です。

和算とは・・・

鎖国していた江戸時代には、西洋の影響をほとんど受けずに日本固有の数学が発達しました。これが和算です。吉田光由が書いて寛永4(1627)年に出版した『塵劫記』は何度も版を重ねています。「ねずみ算」というのはこの塵劫記に出ている問題の一つで、「万、億、兆、京、垓、・・・」という単位もこの本に基づいています。

江戸時代の日本の数学者、関孝和は天和3(1683)年の『解伏題之法』にて行列式理論を発見。また、円に接する正多角形の辺の長さを用い、円周率を11桁まで得ています。



関 孝 和

甲府藩主徳川綱重・綱豊(のち家宣)に仕え、綱豊が5代將軍綱吉の養子になると同時に、直参の旗本となりました。

独学で数学を学び、和算による積分(微分までは至らず)、円周率、楕円の面積計算、高次方程式の解の創始など、日本における数学研究を高めました。

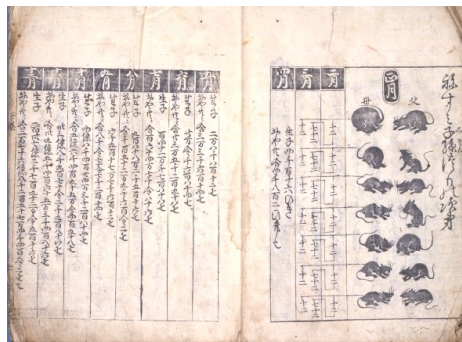
和算は関孝和から始まる、とされています。

明治時代に入り、ヨーロッパ数学の台頭に伴い、約300年の伝統を誇った和算が衰退し、和算家の相伝した数千の和算書が反古に帰して、散佚していきました。

このような和算の衰退を憂えて、日本学士院では明治39年7月に和算書等の蒐集と和算史の研究を行う和算史調査事業をおこし、資料として購入又は寄贈などにより現在では、江戸時代に教科書

として利用された吉田光由の『塵劫記』や関 孝和の『発微算法』をはじめ、調査・蒐集した和算図書及び器具類は20,976点にのぼります。これは、有数の和算関係文献の蒐集として内外学界に重要視されています。

また、和算図書及び器具類の中より、平成5年6月10日に藤田貞資関係の資料(※)が重要文化財に指定されています。



ねずみ算 吉田光由『塵劫記』より



所蔵和算書より

(※)藤田貞資関係資料[重要文化財] 138点

江戸中期の和算家藤田貞資(享保19(1734)年～文化4(1807)年)は、世界的にも高度な発達を遂げた和算のうち、関流の宗統として多彩な活動を行い、多くの門弟と著作を通じてその全国的な伝播にきわめて大きな役割を果たしました。藤田貞資関係資料は貞資の業績をうかがわせるとともに、江戸時代中期における和算の相伝と普及の実態を物語る一括資料としてわが国数学史上価値の高いものです。同資料は、大正7年6月に貞資の子孫藤田菊弥氏より寄贈されました。

和算図書をはじめ本院所蔵の図書・資料は、学術研究のためであればどなたでも閲覧することが可能です。

詳しくは、日本学士院図書担当までご連絡ください。

日本学士院会館施設の利用案内



旧日本学士院会館正面

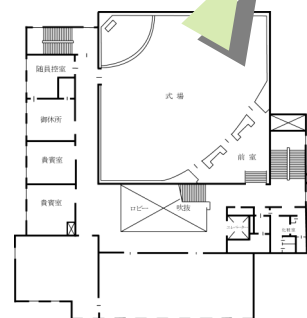


現日本学士院会館正面

建築家谷口吉郎氏の設計による現在の日本学士院会館は、日本を代表する碩学の府にふさわしい荘厳かつ気品と機能性を備えた建物となっています。館内には、授賞式、公開講演会及び毎月の総会が行われる議場を中心に、来賓室、応接室、図書閲覧室ほか大小六つの会議室等があり、それぞれ個性あふれる装飾が施されています。

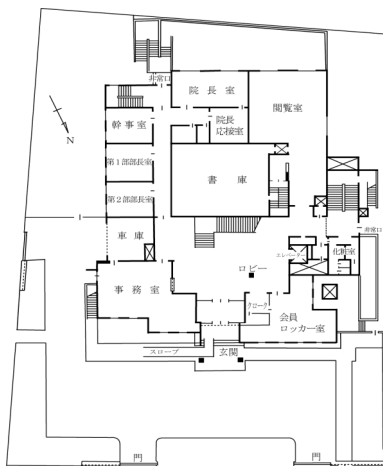
本施設は、学術の発達に寄与するために使用することとしており、国・地方公共団体や公益法人、学会等であれば、学術研究に関する授賞式等の式典、セミナー・シンポジウム等研究集会や公開講座等の講演会及び行事に伴うレセプションなどの開催にご利用いただけます。

詳細については、日本学士院庶務係までご連絡ください。



(2階平面図)

平成19年11月16日に本院において「第7回山崎貞一賞贈呈式((財)材料科学技術振興財団)」が催されました。 <http://www.mst.or.jp/prize/2007/ceremony.html>



(1階平面図)

寄附のご案内

民間企業、団体、個人等から広く寄附金を受け入れ、学術の振興に資する事業を実施しています。金額の多少にかかわらず趣旨に賛同される方々からの申し出を期待しています。

なお、本院への寄附金は、国に対する寄附金として、寄附者が個人の場合は、

所得より「寄附金控除」の適用を受け、法人の場合は、「寄附金損金算入」の特例が適用されます(関係法令:所得税法第78条第2項第1号、法人税法第37条第3項第1号)。

詳細については、日本学士院会計係までご連絡ください。

平成19年度受入実績

受入年月	個人・団体名	金額
平成19年5月	山崎舜平氏	10,000,000円
平成19年7月	財団法人原田積善会	500,000円
平成20年2月	財団法人原田積善会	250,000円
平成20年2月	財団法人材料科学技術振興財団(MST)	3,000,000円
平成20年3月	丸善株式会社	100,000円



ロビー

(会員寄稿) 上野の山にも、時が早く流れる (私記)

日本学士院の建物は、南原繁先生の御尽力により昭和49年に現在の地に建てられた。谷口吉郎氏の設計であり、そこここに日本的風情のインテリアがみられる。外国の友人を連れて行くと感心してくれる。

正門前には寛永寺輪王殿の黒門があり、彰義隊の戦いの時の銃弾の跡が門の柱に残っている。その奥には谷中霊園が広がり、渋沢栄一、徳川慶喜、横山大観等のお墓もある。学士院の斜め左には国立博物館がある。横は国立科学博物館で、シロナガスクジラの実物大模型がそびえている。両博物館の間の通りを西に行くと、左側に旧東京美術学校(現東京芸術大学美術学部)、右側に旧東京音楽学校(現東京芸術大学音楽学部)がある。明治23年に建てられた奏楽堂は、昭和59年に音楽学校側から美術学校側に移動した。私の母、杉中(旧姓)薫が旧東京音楽学校の器楽科(ピアノ)を卒業したのは明治41年であり、山田耕柞氏と同級で、同氏が亡くなるまで交流があった。叔父の惇は美術学校を昭和7年に卒業し、静物に一生執着し、人生後半は仙台で過ごした。

私が日本学士院会員に選出されたのは昭和57年56歳の時で、一番若い会員に近かった。第2部(自然科学)にはコムギゲノムの木原均先生、集団遺伝学の木村資生先生、原形質流動の神谷宣郎先生、内科学の黒川利雄先生、三原色視覚生理の富田恒男先生、スキンドファイバーの名取禮二先生、気象学の和達清夫先生、生物物理の小谷正雄先生、地球物理の坪井忠二先生、数学の彌永昌吉先生らがおられた。第1部(人文科学)には、私が昭和51年に日本学士院賞・恩賜賞をいただいた時に、いろいろ諸作法をお教え下さった、当時の幹事の有沢広巳先生はじめ、何度となくお名前を伺ったことのある碩学がおられた。

上野公園の桜が咲き、そして散り、銀杏が芽吹き、やがて黄葉が道に積もり年

月が流れた。新米だった私も、軽い心筋梗塞をおこしたり、冠動脈にステントを入れたり、胃がんで胃の全摘出をしたり、脊柱管狭窄症で入院、手術等をしているうちに馬齢を重ね、82歳になろうとしている。部長を経て幹事にも選挙された。

日本の学問の粋が日本学士院には集まっている。今日の日本の混濁した社会のかすかな上澄みのように思うことがある。今上両陛下には、日本学士院賞・恩賜賞の授賞式に毎年欠かさず御行幸、御行啓いただいている。学問に御関心の深かった福田赳夫、中曽根康弘元総理大臣らも御出席になり、自ら祝辞を読まれた。思えば、中曽根元総理は、がん対策にはがんの基礎学問たるがんの本態解明が第一と主張された方である。

時代は流れている。私に比べれば遥かに若い会員の方々も増えた。日本の深い叡知と広い見識を備えた会員との接触が、私に教えてくれたものは大きい。同じ上野の森にある日本芸術院の院長の三浦朱門氏は、私が医学生の時、本郷は駒込蓬萊町にある四畳半の下宿の二つ程隣の部屋にいた友人を訪ね、第何次かの新思潮の編集をしておられた。

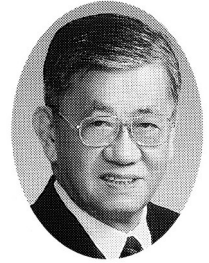
上野の山の時は流れても、文化の精髓が、日本のため、世界のために、落ち着いた静かな光を投げかけるようにと、一人祈っている。

〔註〕文中で三浦朱門氏について述べたことの了承を求めて手紙をお書きしたところ、次のようなお返事をいただきました。

“駒込のボロ下宿のことは、なつかしく思い出します。先日もラ・ボエームという、20世紀初めのパリの芸術青年たちの生活を描いたオペラを見て、あの下宿を思い、私たちの青春の方が、ずっとすばらしいと思いました。ラ・ボエームにも一人くらい医学生が登場してもいいのに、と思いました。(中略)

どんどん親しい人が死んでゆきます。お互いに、長生きをして、精一杯未来を切り開くべく努力してゆきたいものです。”

(杉村記)

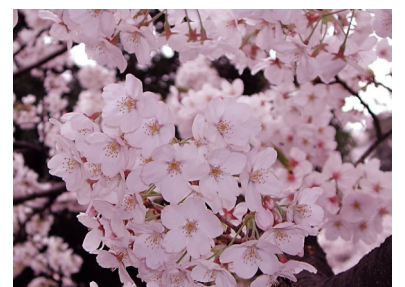


杉村 隆 会員
(幹事、第2部第7分科)

大正15年、東京都生まれ

東京大学医学部医学科卒業。東京大学医学部放射線科医学教室助手を経て癌研究会癌研究所助手所員。その後、アメリカ国立癌研究所、ウェスタン・リザーブ大学留学を経て、昭和37年、国立がんセンター創設と同時に同センター研究所生化学部長就任。研究所長を経て、昭和59年総長。平成6年から12年まで東邦大学長。昭和59年文化勲章、平成9年日本国際賞、平成10年勲一等瑞宝章など

昭和57年12月から日本学士院会員



上野の山のサクラ

会員の逝去

平成19年7月以降、以下の方々が逝去されました。

児 玉 幸 多	会員(第1分科)	平成19年 7月 4日	享年97歳
鈴 木 敬	会員(第1分科)	平成19年10月18日	享年86歳
上 柳 克 郎	会員(第2分科)	平成19年12月 7日	享年85歳
友 田 好 文	会員(第4分科)	平成19年12月17日	享年81歳
斎 藤 眞	会員(第2分科)	平成20年 1月16日	享年86歳
岡 田 善 雄	会員(第7分科)	平成20年 1月16日	享年79歳
川 田 侃	会員(第3分科)	平成20年 2月14日	享年82歳
滋 賀 秀 三	会員(第2分科)	平成20年 2月25日	享年86歳
山 田 晶	会員(第1分科)	平成20年 2月29日	享年85歳

編集後記

日本学士院は我が国の学術の発展に寄与することを目的とした活動を行っていますが、その具体的内容は一部を除いて学術関係者にもよく知られていないと思われます。

本院では今後それらの活動を一層活発に行うことにより、我が国の学術の発展にさらに寄与することを目指していますが、そのためには本院が種々の学術組織や学術団体をはじめ、民間を含め様々な機関、あるいはそれらを構成する方々と、学術の面でいろいろな形で連携していくことが必要と考えられます。

それにはまず、本院の現在の活動状況をより多くの関係者に知っていただく必要があります。そこで本院では、ウェブサイト本院の活動状況及び会員について、より詳細な情報を掲載することとし

ました。また、ウェブサイトを見られない方々も多く居られることと考え、本院の活動状況を掲載したニュースレターを発行することとしました。

本ニュースレター第1号の編集は、本院の運営委員会の下に設置された外部との連携を検討する委員会及び事務が行いました。今後、ニュースレター及びウェブサイトを通じて本院の活動状況が関係者の方々により広く知られ、それにより本院が我が国の学術発展に向けて関係者により幅の広い協力体制が構築できればと思います。

このような趣旨で発刊するニュースレター及びウェブサイトにつき、ご意見がありましたら学士院事務までお寄せいただければ幸いです。

<外部との連携検討小委員会>

日本学士院シンボルマークの由来

「古事記」にも記されている「長鳴鳥(ながなきどり)」は、日本の黎明を告げる鳥という由来があります。鳥は花や草木と一対で描くと、平和で豊かな世界を願う心が映し出されるということで、桜花と対にし、本院のシンボルマークとしました。



日本学士院

〒110-0007

東京都台東区上野公園7-32

電話: (03)3822-2101

FAX: (03)3822-2105

E-mail: shomu@japan-acad.go.jp

ホームページもご覧ください。

<http://www.japan-acad.go.jp/>